

映像はいかに地域に普及したかー地域映像アーカイブデータベースによる分析ー

新潟大学人文学部 原田健一

1 目的

自然の中に散在する映像がメディア化、あるいは産業化され、写真、映画、放送といったモノになったのは、近代に入ってからである。

映像のメディア化は、1つに日常生活に写すものと写されるもの、そして、その映像を見るものという新しい人と人との関係性をつくり出すことになった。また、2つに、映像がモノになることで、人びとの外部記憶装置として、心の領域を外在化させた。それは、時間と記憶をモノとして産業化し複製化することであり、言葉によって編成されていた知の領域を、組み込み直すものだった。

この2つは表裏のように不即不離の関係にある。映像メディアは、地域の日常生活に普及する過程において、各々村社会を成り立たせるために組織化されたさまざまな関係性や共同性といかに繋がり、映像と人との関係を媒介したのか。あるいは、人びとはどう自分たちの社会的記憶を残し、構成しようとしたのだろうか。「新潟」地域に残された映像を発掘し、デジタル化し、データベース化することで、その内容と社会的な関係性のあり方を歴史的に分析する。

2 方法

新潟大学地域映像アーカイブセンターの「にいがた・地域映像データベース」

(<http://arc.human.niigata-u.ac.jp/db/>) は、現在、写真約 27,000 点と動画約 300 本を新潟大学内で公開している（学外よりアクセスする場合には、申請して ID とパスワードが必要）。この映像データベースをもとに、映像と映像との繋がり、その関係性を分析する。そして、写された場所の現地調査、ならびに関連する資料の博搜、聞き取りなどを行い、映像の内容を分析する。

3 結果

写真や映画などの映像には、過去に写すものと、写されるものとの関係があり、その映像を、今、見る人がいるという関係性のユニットがある。このユニットは、村々にあるさまざまな共同性、家や、組や講といった社会的な組織に培養され、映像は普及した。この過程を歴史的にたどる。

①幕末から明治 5 年頃にかけて撮影された、今成無事平（1837~81）とその弟の新吾が撮影した湿板写真は、今成無事平と新吾が地芝居の仲間と演じていた芝居を再構成して撮ったものであった。こうした地芝居は村々の若者組がおこなっており、それを記念して撮影した。

②新潟県の治山課が大正後期から昭和 10 年代に写した「治山事業・写真」は、主に山村の山際の砂防のための小堰の建築の時のもので、こうした山村での小堰の建設は、村組総出のものであった。小堰は、治山課の設計のもと竣工され、村が実施したが、この築堰は自分たちの協同仕事であるという強い意識、主張をもって行われ、記念撮影において、これらの写真には人物の微妙な配置がおこなわれ、工事における実際の役割の軽重、あるいは村での社会的な地位などが反映した。

③1950 年代末『灌漑水利慣行に於ける堰の研究』（8mm）が、佐渡の新保川流域や大野川流域などで撮影された。村の水利慣行を両津高校社会クラブが研究・企画し、両津高校図書館が撮影・作製した背景には、戦前から映画や幻灯などの視聴覚教育が試みられていただけでなく、地域の篤志家や小中学校の教員が郷土教育として民俗学の研究を行っていた動きが、占領期におこなわれた教育改革にもなって新たにつくられた社会科教育のなかへ持ち込まれ、視聴覚教育と結合したことがある。視聴覚ライブラリー、公民館をハブとしてつくられた多くのこれらの映像は、村々にあったさまざまな共同性が、教育行政と結びつくことで可能になった。

4 結論

幕末以来、日本社会に映像メディアが普及してから、地域のさまざまな共同体のなかで、自らの地域やその社会、文化を表象しようとする試みは行われてきた。しかし、地域のヴァナキュラーな共同性から、地域の公共性を形づくる回路は十分ではなく、その公共性が展開されることは少なかった。